

## 川底の小石

捨てようとしていた書類の束から、古い原稿（1985年1月15日）のコピー（30年前の自分）を見つけた。どこかに載せて頂いたのか記憶がないし、著作リストにもない。情意に流された、余りに悪文であったので、この原稿を書き直すことにした。著者の現代思想は端的に言えば保守底流である。保守は自己保身のことでなく、伝統に敬意を払い継承しようとの意志をもっているということである。人の間を取りもつが、世間を泳がず、頭から立身出世は求めない。時流に棹さして、流されても、またその先で、流れに抗う。船頭ではないから、流れに逆らわずに棹をさして、うまく舟を操ることをしない。さて、次に改訂原稿を記す。

時折頂く小冊子を読みながら、発行人の過去における教師への恨みと母親としての未来への希望を感じた。このために、私はこの小冊子に寄稿するという約束を果たせずにいた。なぜなら、私は自ら関わった「教師との過去」から、教師や教育が嫌いでしかたなかった。もちろん、良い師に恵まれたからこそ、ひねくれ者でありながら、道を過たなかったのだが。しかし、余りに因果なことに、いわゆる教員養成系大学に教育職を得ることになった。

私の心の鏡の裏側は水底の小石のように、自己の姿を最小限にして、流れのままに暮らしたいと考えていた。ところが、鏡の表側ではせめてもの慰めとして、現在の教育のあり方への批判的対案を出そうと、教育の枠内でますます厭教育的な心情を募らせながら、呻吟してきた。どれほどの大きな矛盾を抱えきれるか、この矛盾の大きさが人間の度量を示すのだと自らに言い聞かせつつ、新たな教育への対案を探ろうとしてきた。

10数年前に、大学解体とかアカデミズム粉碎とか叫んでいた学生たちは皮肉な言い方をすれば無知なロマンチストだったのだ。当時の学生たちが頑張らなくても、大学は初めから、すでに解体すべき対象ではなかった。アカデミズムよりも卑俗が大学を支配していた。いつの時代でも組織より個人に信義を求めた方が、何事も確かである。自由という代物がまずは個人に属しているからであり、私が求めるささやかな自由は古臭いアカデミズムにあったからである。あの大学キャンパスを、後ろ手を組みながら、うつむき加減にぶつくさ何事かを唱えながら歩くああいう人になってよいと考えたのである。

川底の小石は、時の流れの中で世に見捨てられた人々、草々との出会いに石心（赤心）の平安を得る。山に発した初めから、海に至る、始めから終わりの見える旅ではあるが、私小石には人知れない旅行記を書き綴る意思はあった。

この当時(1985)すでに、教育というものは人から施されるものではなく、自ら自分にするものと思っていた。したがって、学習という言葉の方が好きであった。教師というものは旅路で袖擦れ合う縁を、人の求めに応じて結ぶものである。教師はせめて若者の伸びる芽を摘まないように注意し、伸ばしてあげようなどと気負わないのが良いと思う。教職について10年余の当時は、気力も才能で、気力の充ちた人は一人でも歩ける。しかし、無気力の人を励まして、座り込んでしまい、前を向かせることはできないと、教育的行為に無

力感を抱いていたようだ。

多くの才能の芽がありながら、気力のない人をみると、気力も前成説的にもって生まれる一種の才能だと思わざるを得なくなってしまう。どのような辛い時代でも、世間を無力感が支配していても、少数の正直者は社会をより良くすることに強い情熱を示してきた。世間のかしましい教育論議に振り回され、学校教育現場の教師は精神的に取り繕い、澄まし、乱している。無力感の中でも、頑張っている少数者はいるものである。彼らは類を求め、孤立しないでいてほしい。

個人として自己満足できる作品づくりが最も確かな意思で、この意思とは世の中の流れ行く先を見据えることである。大学闘争が敗北、自壊してから、社会運動に参加して世の流れを変えようなどとは考えなくしようとしていた。ましてや、人々に社会運動に参加しようとは言えなくなっていた。自分の作品にこだわる方が、説得力があるように思うようになっていた。ささやかな作品を身近な少数者が共感してくれれば、それで十分に心強い。顔の见えない得体が知れない、心が結びつかないものは頼むに足りないと思う。対話ができなければ、人間関係は結べない。無関係が支配する世間で、古くても良い伝統に寄り添って暮らしたい。一面で、華やかに見える世の中で、一握りの本質を探して、短い人生を過ごすということになる。

現代教育への対案は、すべてを自己完結させることの自由である。教化されず、評価に関わりなく、失敗をたくさんして、結果は自ら招き入れたい。そこで、私の講義ではモノづくりを中心に置いて、後から知識を補うという手法をとることにした。野に出て、実物を五感で感じ、見て考え、その後に先人の知識を再確認してから加える。誰もが最初の発見者になり、個人の発見からすべてが始まる。人は自ら見つけたいのだから、横から教えられたくはない。自分は自分だ。

その後 30 年を経て、教職を辞するのを前にして反省すれば、余計な説教をして、お互いに不快になったことも少なくはなかったので、旧学生諸君にはここに陳謝する。しかし、教育への対案に関する原則的な思考は深化、展開して、「ELF 環境学習過程」を提起できたことに、川底の小石は自己満足している。(2014 年 2 月 9 日改稿)